

## 奥野 忠一・山田 文道 「情報化時代の経営分析」

東京大学出版会

経営分析の手段として発明された道具のうちで最も古いものは複式簿記であろう。また複式簿記の発明なくしてはその後の資本主義の発展はなかったとも言えよう。複式簿記を利用してつくられる貸借対照表は今日でも企業診断のための基礎資料である。ただ貸借対照表は一時点における断面であり、生き物である企業の活動を十分にとらえているとは言えず、近年では貸借対照表よりも損益計算書が重視され、また企業活動を多面的にとらえるために、貸借対照表、損益計算書の両者のデータから多数の比率が計算されている。

これらの無数といってもよいほどの多数のデータからある企業の経営内容を分析することは容易な作業ではなく、分析者の個人的な能力や経験に左右されがちである。このような個人差のない客観的な分析をするための方法として近年発展しているのが多変量解析の応用である。これは企業の経理がコンピュータ化されたことと、多変量解析自体がコンピュータの利用により飛躍的に進歩したことと両面から促進されたと言えよう。

ところで経営分析への多変量解析の応用については著者の1人である山田氏などによりいくつかの論文が発表されており、また他の1人の著者である奥野氏らの「多変量解析法」(日科技連)にもその一部が紹介されているが、今度東大出版会から単行本の形でまとまって多変量解析による経営分析が、手法だけでなく適用例とともに公表されたことはきわめて喜ばしい。

本書の構成は、

1. 序論
2. 経営分析に用いる財務指標
3. 財務指標の統計的特徴
4. 主成分分析法による総合指標の抽出と企業評価
5. マハラノビス平方距離による異常企業の抽出と層別管理
6. 判別関数による経営分析
7. 経営分析におけるクラスター分析の適用
8. その他の統計的手法

となっている。

1および2は準備の章であるが、3はきわめて示唆に

富む章である。多変量解析とかぎらず、統計的手法を実際データに適用するとき一番重視しなければならないのはオリジナル・データの十分な吟味である。とくに企業に関するデータは工場における品質管理のためのデータなどところがって、シューハートのいう「管理された状態」にあるデータではなく、いろいろな数値で正規分布に近いもののほうがまれである。そのため多変量のあれこれの手法を適用する前に原データの分布をながめ、異常値を除去し、場合によっては変数変換をするなどして、多変量解析の適用が妥当と考えられる程度に原データをしぼりこむ必要を著者は強調されているが、これは多くの応用研究者にとって参考となる教示であろう。

4以下は多変量解析の適用の具体例であるが、手法の入門としても十分役に立つような解説があり、多変量解析の手法だけに興味をもつ人にも参考になるであろう。たとえば7のクラスター分析の適用についての章はクラスター分析の解説そのものが他の成書では(奥野氏の「多変量解析法」もふくめて)あまり日本語では紹介されていないので、この章のかこみ記事のチャーノフのFace Methodもふくめて参考になる点が多いと思われる。なおつけ加えると、この本のかこみ記事はそれぞれは小さな解説であるが、重要なことをわかりやすく説明してあってきわめて有益である。

8ではその他の統計的方法として回帰分析におけるPSSの利用などについての解説が述べられている。

ただ全体を通じて時系列的なデータについては多少ふれられてはいるものの、ほとんど取り上げられていないことと、それとも関連があるが、多変量解析の中でおそらく一番よく利用されている回帰分析については、たぶん適切な応用例がなかったためとは思われるが、取り扱われていないことは、著者の考え方もあることとは思いますが評者としては残念な気がする。これらの点については著者に将来の続編を期待したい。

ともあれ、新しい分野についてのすぐれた解説と適切な応用例についての良書が刊行されたことを喜びたい。

(門山 允)